

# 新井白石の世界圏認識

宮崎道生

本年二月十一日（新暦の三月十二日）は、恰も白石生誕満三百年の日に当るので、白石研究者の末端につらなる者として、これを記念すべく、匆卒の間にこの小稿を草した。博雅の一顧を煩はしたい。

## 1

(1)  
新井白石と云へば、一般には政治家にして同時に學者であつた人物、といふ風に受取られ、さういふ判定のもとに二つの観点から觀察され勝ちであるやうである。然しながら、かかる判定は今日のことであつて、明治以前に於いては、一部の學者を除き、白石を學者として取扱ひ、その業績を正しく評價するといふことはなかつたと云つてよい様に思われるのである。これには然るべき理由のあることで、白

石の學問は主として甲府侯綱璽、及びその後身たる將軍家宣の侍讀としての立場に於いて形成され、また實際政治に關与し獻言したことから自然學問的研究を必要とするやうな事件にも遭遇したのではあるが、その學問研究の成果は少數者の眼にふれるにとどまつた訳で、中には秘匿せられたものもあつたとが、白石の學問に對する正当なる評價を妨げた大きな原因と認めることが出来やう。勿論、白石は室鳩巢とならんで本門を代表する儒者と見なされはしたが、白石自らが述べてゐるやうに、門人といふべきものがなかつた——強ひて云へば土肥元成や益田鶴樓（詩の方面）の如きがそれに當るが——ことも、その一つの原因に数へられるべきものかも知れない。即ち白石は、儒者、政治家——正確に云ふならば經世家といふ判定を別にすれば、一般にはむしろ

詩人として令名の高かつた人なのである。

一部の學者といふのは、例へば経済學者としての太宰春台や、國學者の堤朝風・平田篤胤、厂史學者としての隈山陽、世界地理學者山村昌永等の如き人がそれであるが、これらの學者はいづれも白石から啓発され裨益されるところ少くなかつた人々で、就中山村昌永の如きは、白石を絶讃して

「公ノ學識卓絶ニシテ、倭漢古今ノ事莫ヲ詳究スルノ餘リ、遙ニ海外ノ事ニ及ブ。其宏量遠大ニシテ、

広ク訪ヒ遠ク求ムルノ程到ナルニ非ズンバ、當時ニシテ何ソ此撰アラシヤ(筆者註一此撰は訂正纂采覽異言を指す)

と云つた程である。かく山村の絶讃した采覽異言は

同知の通り世界地理學者としての白石の地位を決定するものであり、鎖国時代學界に於ける金字塔の一つに数へられるものであるが、本書の完成に至るまでの白石の努力の迹を顧みる時、我々は白石の本書速作についての深い思念を見出すのであつて、ここに學者としての白石と経世家としての白石とが融合してゐることを確知し得るのである。此の点については既に卑見を申述べたことがあるので詮じ、本稿に於いては晩年に於ける他の諸著作をとり上

げ、これを采覽異言・西洋紀聞等との関連に於いて検討することにより、白石に於ける世界圖認識の進展の姿を把握しようと思ふ。

## 2

鎖国時代とは云つても、白石の時代にはすでに南蛮紅毛人の存在は知られ、ヨーロッパについての知識も多少は一般人にもあつたことではあるが、これを學者の認識について見る時、例えは、著名な西川如見の華夷通商考(初版の刊行は元禄八年のこと)の如きは、全体として観れば、到底采覽異言の比ではなく、同日にして談すべきものではない。

然らば、どうしてかういう相違が生れたのかと云ふに、白石が幕府の振機に参じて直接異邦人と面接し得たこと、而もその面談が単なる興味や物好きから出たものではなく、深い関心と徹底せる探究慾のもとに、重大なる任務を帯びて行われた、ということによるものであらうと思ふ。

そこで白石の世界圖認識の進展に於いて、その契機となり促進剤となつた事件を求めると、大凡そ次の様になるであらう。

(1) 宝永六年四月一日（此以後続行）長崎貿易問題

への関与と建議

(2) 同 六年十一月二十二日（此以後三回）潛入宣

教師シドチの訊問

(3) 正徳元年一月八日

琉球ニ王子との対談

(註) 此れ以前、宝永七年十月に琉球への復書の草を伏つた

ことがある。

(4) 同 元年十月十七日（此以後引続き数回）

朝鮮使節と対面ならびに対談

(5) 同 二年二月二十七日及び三月五日

オランダ人との対談

(6) 同 四年三月三日

オランダ人との対談

(7) 享保元年二月二十七日

オランダ人との対談

この他、なほ挙げるとすれば、年時不明であるが、  
蘇本<sup>スエーデン</sup>商人との面会もある。

右について簡単に説明を加へると、(1)は海外貿易  
問題に關与し、これについて進言するといふことが  
さっかけとなつて、海外とくにシナとオランダとに

ついでに認識が、今迄の常識的なものから可成り深  
いものになつたと考へられるので、この事は後の(5)  
(6)(7)にとつて一つの準備となつたと解することを出  
来やう。(2)が極めて重大なる意味をもちつことは改め  
て説くまでもないことで、白石が全世界、特にヨーロッパについて眼を開かしめられたのは、此のシド  
チ取調を機縁とする。而して後のオランダ人との対  
談も、シドチから聴取し得た諸事象が予備的知識と  
してあつたからこそあれだけの成果を挙げ得たので  
、まさに白石の世界圖認識の基底はここに築かれた  
と云つてよいのである。(3)は、琉球が朝鮮となら  
んで、鎖国時代に於ける通信國であり、我國とシナの  
兩方に臣礼をとつたといふ微妙な政治的地位を、白石  
がはつきり認識するに至つたのは、琉球王子との対  
談といふ機会をもちつたことによると思われるので、  
後述する南島志の速作もかういふ事実が機縁となつ  
たものと考えられる。(4)(5)も、よく知られてゐる  
ように、白石の海外知識を精確且つ豊富ならしめた  
もので、(6)のシドチ訊問と天に最も重要な事件に数  
ふべきものである。幸ひ、(5)の会談はすでに別稿に  
於いて紹介したように、その覺書が現に新井家に伝

はつてゐて、その時の撰纂が詳しく判るのである（<sup>註</sup>1）の面回の分は今の所不明である（<sup>註</sup>2）。

以上の諸事件が契機となつて白石の世界圖認識は進み、それが結晶しては最も素朴な看依——ヨハン・バッティスタ物語から、初稿本西洋紀聞となり、他方初稿本采覧異言となり、また和蘭紀事及び阿蘭陀考ともなつたのであつて、他方、やはり今日その所在を明かにし難いが西洋人物集、その他西洋に関する諸着が生れ、さらにはわが北地南境の研究書としての蝦夷志、南島志等々の看速ともなつたのである。これら諸着作の中、西洋紀聞と采覧異言の二書の成立については既に卑見を附陳したことであり（<sup>註</sup>3）和蘭紀事及び阿蘭陀考について、或る程度その内容の復元を試みたのであるが（<sup>註</sup>2参照）、これらの考究の面に於いて私の得た判断では、白石の世界圖認識に於いて推進力となつたものは、海外貿易とギリシヤ・問題の二つに対する関心であり、更にこれをつまめれば国防的関心に帰着するものと見はれるのである。而してその国防的関心は、致仕以後、幕閣を去つて隠遁的生活に入つた晩年に於いて、まさりこそすれ減じなかつたことは、紀聞・異言二書の改訂

増補の過程を通じて知られるのみならず、蝦夷志・南島志をはじめ、他の対外的意味をもつ諸着や抄録類によつて察知せられるのである。

## 3

享保元年、致仕以後の白石の編着書の中、対外的意味をもつものは、

（1）方策合編 享保四年

（2）南島志 同四年（初稿本、<sup>別名、南倭志</sup>、<sup>琉球志</sup>）

（3）琉球国事略 同四年以後

（4）蝦夷志 同五年（初稿本、<sup>別名、北倭志</sup>、<sup>蝦夷志</sup>）

等であり、オランダ人との会談がきっかけになつて出来たものには東音譜（享保四年）があり、年時不明ではあるが晩年のものと推定されるものに、外交に関する論文の幾つかがある。その他、同様年時不明であるが、国際問題、海外事情に関するものとして、抄写本中に注目すべきものが色々ある。（此の中には晩年のものも含まれてゐると考へられる）。

（1）の方策合編は、今日はその序文のみを残して伝はらないものであるが（<sup>白石先生</sup>、<sup>遺文所収</sup>）、序によれば本書は、十巻から成り、我国と外国との間の往復文書二



百十七篇を収め、古体今体の詩二百七十七首を附載するものさめつたらしい。恐らく善隣国室記と同様の体裁をもつものであつたらう。所収文書の多数である点からしても、国室記を凌ぐ外交文であつたらうことは疑ひない。序文の日附が「己亥十月望」とあるから、享保四年の撰であることは確かである。

②の南島志は、別名琉球考によつて直ちに判る通り、琉球を収めた歴史地理書で、

世系才一 世系才二 官職才三  
 宮室才四 冠服才五 礼制才六  
 文藝才七 風俗才八 食貨才九  
 物産才十

といふ構成をもつ体系的研究書である。その構成の整然たる点、叙述の詳密である点に於いて、後の著作蝦夷志にまさるものである。これは資料の多寡に基づくものと考へられる。(3)の琉球国事略は、五事略中に収められてゐるが、その内容は

○異朝の書に見えし琉球国の事  
 ○琉球国人所申其国の事  
 ○琉球冊封使并朝貢使の事

等を含み南島志よりは簡略であるが、皇朝事項はこれを缺くことなく、明快な和文を以て叙述されてゐる(南島志は漢文体)。才一項中の割注に於いて、鄭廻につき「南島志には鄭廻とあり今ま諸書を参考し廻に従ふ」(全集才四、大五九頁)と記してゐることによつて、本書の述作が南島志よりも後であることが明瞭である。

④の蝦夷志は、南島志と同様その書名に夷、夷があり、両者併せて南北倭志などと書かれたりしてゐる(中略漢書宛手簡、全集才五、三六頁)。これは、その序文によつて享保五年に成つたこと明らかなであるが、別稿(采覽異言)に於いて論じた通り、本文の註記の解釈の仕方如何によつては、本書の完成は享保八年と推定することゝ出来るのである。その内容は、

蝦夷地図説 蝦夷 北蝦夷  
 東北諸夷

等の諸夷を含み、元は與に蝦夷人物図(白石自身の作ではない)を収載してゐた様である。本書が蝦夷研究の嚆矢をなすものであるのみならず、内容的にすぐれてゐることは既に定評のあるところである。

さて以上挙げた四書中、才一の方策合編は今日亡佚して、了つて内容が窺はかでないといふことを別に

しても、これの看做はその系列をいふならばむしろ  
経邦典例と同系と見るべきもので、今問題とする世界  
地理学の系列に属せしめることは適切でないやうに  
思われる。然らば他の三書はどうかと云うに、琉球  
に關する二書は一つには清朝シナと我國とが此地  
を夫々親屬國と看做してゐたことから、紛争を起  
し得るといふ危機の念があり、アジアとこれを動か  
すヨーロッパの一般情勢が次第に明かになるに伴ひ  
琉球についての認識を深めようとして書きまとめ  
られたものではないかと思われるのであり（後述す  
るやうに、白石は康熙帝のやり方に警戒の眼をむけ  
てゐた）。これに対して、蝦夷志の方は、オランダ  
人の探險の事実や難題に就いての認識の進展が白石  
を刺戟したもののやうに考えられるので、共に世界  
圖認識と浅からぬ關係に立つものと認めてよいと思  
ふ。これは天々の記述を通して推察されるところで  
あるが、蝦夷志の方はまた前述の紀聞・異言・記事  
・考の四書との関連に於いて考える時に、然う認  
められることである。

既に指適されてゐるやうに、晩年の白石の背見を  
よく伝えるものは多数の書簡で、今日全集に収載さ

れてゐる小濱復庵・室鳩巢・安積港泊・佐久間有巢  
・土肥元成等に宛てたものを綜合して考えれば、大  
体白石の思考や生活態度・身辺のこと等が推しはか  
られるのである。そこでそれら書簡によつて白石の  
対外的意識・関心・情勢判断等を探索して見ると、享  
保元年以後に於いては、左の如き結果が得られる  
のである。

#### 享保二年

①西洋紀聞・阿爾陀考にふれたもの

②復庵宛一四月二十三日・五月十六日以前・

同十六日・同十七日（註：これについては、  
名山藏手簡附録参照）

③蝦夷志の事  
復庵宛一六月二十二日・七月二日

④物理小識・海外事物（魚鱗）の事

復庵宛一正月三日（此年のものと推定）

⑤蝦夷考・琉球考の事（述作の予定）

復庵宛一六月二十二日（註：これについては、  
名山藏手簡附録参照）

⑥西洋人の音（讀）字

復庵宛一七月二十一日

享保四年

#### 享保四年

①南倭志・北倭志の事（脱稿）

復庵宛一 日時不明 (註:これについては、  
名山教手簡附録参照)

(2) オランダ人との対談の一節 (楓の事)

復庵宛一 日附不明

(註) 此れと同内容のことが洞巖宛手簡(享保五年)に見  
える。

### へ参考

白石の談話一 復庵の書簡(宛名不詳)に見  
えるもの

(イ) オランダ・カルタン・羅艮の事 十月

(ロ) 朝鮮・琉球への銀の流出 十月

享保六年

(イ) 羅艮ことは

洞巖宛一 二月十六日

(ロ) 康熙帝蘭亭記の事

洞巖宛一 六月二十一日

(3) オランダ人との対談

洞巖宛一 六月二十五日

(4) 朱一貫の台湾奉兵の事

洞巖宛一 日附不明(十月?)

享保七年

(イ) ローマ人(シドチ)との出会・オランダ及び

羅艮等の事

澹泊宛一 十月

(2) 呂宋島の日本人・オランダ・羅艮の事

澹泊宛一 十一月朔日

享保八年

(イ) 康熙帝の政策その他

澹泊宛一 正月

(ロ) 南北倭寇の事

澹泊宛一 七月十二日

(3) 靖台実録の事

澹泊宛一 閏四月二十五日

右を通観して知られることは、白石が友人の稱め  
に依じて対外国際関係の看書を貸し、或は海外事情  
について語つて居り、而してその範圍が限定されて  
はゐるけれども、それで蝦夷・琉球をはじめとし  
て(朝鮮のことと色々語つてゐるが此処では割愛し  
た)、台湾・呂宋(フィリッピン)・清朝ミナ・羅  
艮・ヨーロッパ諸国(主にオランダ)に及んでゐる  
ことである。これを采覧異言以下四書に示された白  
石の知識に比べれば、全くその一端が投擲されたに  
過ぎないのであるが、これによつて晩年の白石の

心的態度の側面が顕知せられるのであり、而もそれは石の四書一少くとも異言と紀聞の増訂の作業が続けられてゐた事実と対応するものと考へられるのである。

## 4

采覧異言が歿前数日に於いて完成を見たことは、

土肥元成が安積瀧泊に告げたところであるが、不幸にしてその自筆本は今日伝はらない。それならば現行本一白石全集所収のものゝの成立は何時かと言

は、別稿（采覧異言の成立）に於いて考証した通り、少くとも享保五年以後、同八年頃の間と推定されるのであつて

、不<sup>如</sup>断に筆が行はれたとは云へないにして、完全なものに仕上げようと考へ、その為の努力を続け

てゐたことは、疑ひないのである。西洋紀聞の方

、その完成は享保九年もしくは十年であること、同様該書の本文批判によつて明らかにしたことである

ので、これらを通じて、白石の世界圖認識が常に進展して止まなかつたことが知られるのであるが、さ

ういう世界圖認識の進展は、單なる海外知識の増進にとどまるものではなく、既述の通り国防的関心と

深くつながるのであつて、大々が相互に他方を利戟したものと推考せられるのである。今問題とする煥夷志以下の諸書が、さういふ状況の下に生み出されたことは、石少くその背景を読みたまうに、述作の時期からすでに察せられることであるが、それそれ原本に就いて見る時それは一層明白となるであらう。

先づ南島志であるが、これは総序によつて判る通り、諸書以下のシナの尺書及び明代の官吏陳侃の書いた倭語訳録二巻の記載が誤謬を含み不備であることから、国史を據り所としシナ代の尺書を参酌すると共に、琉球人から説明をきいて、「倭以真国人之言」一本書は成つたので、後人の参考に供しようといふのであるが、その終りに

「細譯旧圖以依南倭志」

と見える様に、南倭志と云つてゐることが注意を引く。総序ならびに本文を一読してわかることは、琉球と我国との關係は彼れとシナとの關係よりも遙かに深いといふことである。世系オニに於いて記す如く、舜天王以後は日本人の血が流れてゐることを始め、（秦皇朝の子と伝へられてゐる）伊勢八幡の熊

野の神々をまつた祠社が多くあり（風俗ヤハ）、言語風俗藝道等に於いて共通する所あり、（文藝ヤセ・風俗ヤハ・食貨ヤハ）推古天皇の時以末使が来朝して政治的にも古来關係が深いことを述べてゐるのである。然るに、ヤル代察度王の治世、明の洪武年中我が古野時代に明の封冊をうけてから引つゞき清朝にも臣礼をとるやうになり、慶長十四年島津の征伐があつて以来は我國にも服事することになつたから、周知の通り、國際政治上微妙な立場に置かれるに至つたわけである。而して、白石が、清朝の出方に、警戒心を抱かせたと思はれる理由は、主として、康熙帝の強引な對外政策にあつた様である。それは前掲、安積港泊に与えた書簡によく、現はれてゐるところで、白石の推測では康熙はその王子の一人を朝鮮王の養子にする事により、朝鮮を完全に屬國にしうとしたのであり（此事については、正徳元年末朝の朝鮮使節にも避かめて居る）、また我國との關係に於いては、鄭氏の反抗が止んで邊海令が撤去せられたことにより、清の商船が多数来船したことを以て康熙帝の謀略であるかの如くに見なし、これは北方の銀と銅とを販賣し候課と見え、と

述べてゐること全集オ五などがそれである。琉球との關係については

「琉球などを以明朝と遣ひ殊の外念比にて、毎年参候事を許せし候。正賣の年銀八百貫目、按賣の年銀四百貫目づつ取られ候。」

といひ、其の銀の出所については

「其銀は琉球には一分も無之候て、薩州よりつゞけ候事に候。公儀幕府へ申立、毎年此方の銀をつかはされ候事に候。」

と述べて

それが我國から流出してゐることを指摘してゐる。因みに、我國から朝鮮唐を琉球への銀の

流出額が毎年二十八百貫目、その中琉球だけには八百貫目づつ渡してゐることを小瀬復庵に語つてゐる

（前部参照「享保四年の」）。なほまた、趙泰徳尊朝鮮三使との私的会見の際に、泰徳が自國を讚美して「天下皆臣在。而独我國不改筆削」といひ、清國でさえ

も、我國を礼儀の邦と見なして非礼を加へない、「普天之下我無敵東同し、貴邦も中華の制を用ふる意向があるか」と高麗軍に出たのにこたへて、貴國は貴

子の子孫の國であるからとて期待をかけてゐたが、その儀容冠帽はみな明朝の模倣にすぎないのを見て

大いに失望した、当今清国は代を易へ物を改め、其の国俗によつて天下を創制しようとして居り、貴邦や琉球はすでに北進してその属国たるの態度を明かにしてゐるが、而しなほ辨髪左衽を免れて居るのは、一体清朝の徳政の結果なのか、それとも二国がその背後にある我が日本の御蔭を蒙つてゐる為であるのか、何とも云へないではないか（「抑二国有假蠻東方亦不可知也」<sup>(註五)</sup>、<sup>(江田筆談全集オ四)</sup>と云つた態度の中に、朝鮮・琉球を中にはさんでの我國と清朝の対立対峙の形勢に注意を怠たらなかつた白石の心意がよみとれるのである。

以上述べた如き琉球について白石の深い関心は、白石が貿易問題に關係をもち、著名な長崎貿易制限令の立案者となつたこと等から、清朝の政策に眞剣な注意をはらふやうになつたことと共に、教上の如き事情から世界圖認識がすすみ、琉球の國際的地位の重要性が強く感ぜられるに至つて、一段と深まつたものと考えられるので、此の点は、南島志を南倭志と稱して北倭志（蝦夷志）に對置せしめ、而して南北志と併称した態度と併せ考へる時、<sup>(註五)</sup>即ち對外的意識の強く働いてゐる蝦夷志を検討することによつ

て、一層明白になることと思ふ。

## 5

白石の蝦夷についての関心は、人類学の面の興味とも關係があるやうであるが、政治的には正徳四年、北条新左衛門の侯として室永軍向に松前に行つた通事勘右衛門から彼地に於ける騒擾事件の模様を聞いた事によつて、<sup>(註六)</sup>刺戟されたことと、他方オランダ人からエゾをはじめ北方大陸、北極海のこと等を聴取したことによつてそれが一層深められたのではなにかと思ふ。いふまでもなく白石の地理的考察は、マテオリッツの萬國坤輿圖とヨアンリブラウの東西兩半球圖―白石の見たものは一六三九年頃の作と思はれる―とによつて行はれたのであり、此の、方面の、探險が未だ殆んど行はれなかつた當時の事であるから、エゾ地を含む北方極東圖についてはブラウ圖と雖も甚だ不備なものであつたので、シドチヤオランダ人の説明が曖昧であつたこととも相俟つて、蝦夷志に於ける白石の記述には臆測を逞しくした部分が加はつてゐる。

當時ロシアの極東政策は次次に進捗して居つたと

は云へ、未だ我が北辺をさわがすには至らなかつたから一口シヤの探險隊が千島にやつて来るのは白石歿後固くなくのこと、蝦夷志の速報は口シヤの東進とは直接的には関係をもたないが、白石はペートル大帝のロシア帝國建設の眞相を従て清露間に締結されたネルテンスク條約（元禄二、一六八九年）について正確な知識を持つてゐなかつた——エゾ地と釧路・タルタリヤとの近接といふ認識が白石に此の地を新たなる眼と関心とを以て見なほせることになつたものではあるまいか。白石が特に釧路の存在に注視をむけるやうになつたのは、恐らく康熙帝のカルタン部族征討の事實を長崎にやつて来た清朝の商人から聞いた（間接的に）直接には長崎奉行の幕府人の報告によつて）後のことであらう。勿論、これについてはシドチからきき、オランダ人からきいて居つたので——イスパニヤ王位継承戦役（一七〇一—一七一四年）に關連して——西洋紀略にも承覽異言にも羅阻についての説明があるが、而してそれが予備的知識であつたのではあるが、この強盛を突感として持ちえたのはアジアを

舞臺とする右の事件をきき知つた後のことではあるまいか。タルタリヤについてのシドチの説明は甚だしく不十分なのであつたらしく、正徳二年はじめオランダ人と会談した際やや詳しくききえた様であるが、白石のメモした所は左の如きものであつた。

一 近年の軍の事スパンヤ國王死て子なし（下略）  
一 昔ヨウド（筆者註 ユダヤ）と云國大にし強し 今八國ほろひて諸國に分散してヨウド人としてあり 一國も有し者ハなし

一 其後ドルコと云國大クなりて 隣國に敵すト  
き者なし 加艱丹（註 カン）の祖国もドルコの  
内と成 此國羅阻と助け合て一所に成 エロ  
バの國々ををかす ドイチと戦ふ事度々也  
ムスコヒヤと戦ひて二十年の和談と成。

（外國之事調書、正徳二年）  
（二月二十七日の末）

私見では、此のメモの記事は、紀略にも異言にもとり入れられたと思はれるのであるが、これは天々の記事の比較に於いて明瞭である、白石が羅阻の存在を重視するに至つたのは、前掲小瀬復庵の書簡に記された様に、その一族（白石の理解した所）たる



カルタンが康熙帝と犬を交へたといふ情報を手にした結果であらう。即ち、復讐の手紙の一節に

「朽又蝦夷と阿爾陀とは、うしろ合せの地に御座候。驢阻も同地方に御座候て、阿爾陀とは地つゞ

きの方に御座候。近軍阿爾陀より驢阻をせめ、中

国へ乱入可仕程の大威取合御座候て、則役方角

の葛兒冊と申候國へ此四五年前か、康熙天子自

身征伐出軍有之候由、長崎之参候高船の看申候由

被承反候。葛兒冊はカルタンと讀申候由に御座候

。全集才五  
レニ七七頁

と見えるのがそれで、これより三年後の享保七年、

安積菴泊に宛てた白石手簡（前述）にも、次の如く

見えてゐる。

「近軍康熙天子親征のカルタンと申すも、北高海

の東南の國と聞え候。天竺とも唐山とも驢阻とも

、只一片の地にて山河を以て界限し候由に候。」

全集才五  
三〇〇頁

右は清朝と驢阻との關係についての認識であるが、もう一つオランダと驢阻との關係―西書の戦争の事実を知ったことと―これは蓋しオランダ人が

ら聴いたものであらう。驢阻の強盛を印象づけた

材料の一つであつたと思はれる。右と同じく享保七

年十月、澁谷宛書簡に於いて、オランダの事を述べ

「七八年以前に驢阻との大戦も有之候き。驢阻

の、地は東の方、此方蝦夷の地へ近く候て、七八

萬里も西の方へ」とつゞきにて、阿爾陀なども

軍仕候事に候。全集才五  
レニ七七頁

と云つてゐるのがそれである（この中で、蝦夷と驢

阻とが近接してゐることを述べてゐることと注意を

要する）。

改速の通り、蝦夷志初稿本は享保四年から五年の

始めにかけて成り、その後補筆が行はれて享保八年

までに及んだらしいことが推考せられるのであるが

、本書の書かれた時の白石の驢阻認識は以上の如く

であつた（以上は国際政治上に占める驢阻の地位に

ついての認識を問題としたので、その他驢阻につい

て種々知る所があつたものと思はれる。（註8）

蝦夷志の内容については、前節にかかげた項目で

は、輪廓が判ると思ふが、此のうち右の驢阻との地

理上の近接にふれたのは、最後の東北諸夷の項中の

次の一節である（和合の）。

「舊聞和蘭人之言、云クルンラント地方、是大而  
在天地極北<sup>（北極）</sup>。故曰先<sup>（先）</sup>不到者、概凡居<sup>（居）</sup>年常多霜氣  
而寒。其海出鯨及異魚。和蘭人捕鯨于此。又云、  
南八十耳和蘭人有<sup>（有）</sup>抵蝦夷東南邊口<sup>（口）</sup>者。而未<sup>（未）</sup>番西北  
海<sup>（海）</sup>。東有二島、其一則小島也、其一唯見<sup>（見）</sup>西南一  
隅耳。地形廣狹未<sup>（未）</sup>審。蓋其所謂蝦夷東海二島船在  
其中者、夷人所稱クルミセ地方也。夷言クルミセ  
、即番稱クルミラント也。夷云ミセ、番云ラント  
也。並是此云島也。萬國圖作<sup>（作）</sup>臥龍蝦夷<sup>（蝦夷）</sup>、或作<sup>（作）</sup>臥龍  
約垂者、即此。又按、夷人相傳三十七島中、曰シ  
キアシコタレ、曰シキモシ、曰シキモシリ、蓋是  
萬國圖所載蝦夷東<sup>（東）</sup>西<sup>（西）</sup>羣島地方所在<sup>（在）</sup>海島也。シキ、  
即<sup>（即）</sup>空<sup>（空）</sup>也。夷語アシカル、此云<sup>（云）</sup>夜也。夷語ユタン  
、此云<sup>（云）</sup>國也。アシコタン、猶言<sup>（言）</sup>夜國也。萬國圖、  
空羣島北海有<sup>（有）</sup>夜國者、或此云<sup>（云）</sup>ミセ、云モシ、云モ  
シリ、皆一轉語耳。<sup>（註）金澤大八</sup>

以下の論述に關係があるため、右項をいとはす引用  
したが、白石はエゾ人から東北海中に三十七島<sup>（島）</sup>  
今日の千島列島<sup>（島）</sup>の存在することを聞いてゐながら  
それを借用せず、誤謬の多い萬國坤輿図に頼り、

同時に蝦夷地圖<sup>（註）</sup>をも見てゐる（「今觀蝦夷地圖二  
國之地乃若<sup>（若）</sup>彈丸黑子」）右引用訓註の前文）——  
、その上オランダ人の不備な説明にもとめられたた  
め、地理學的には非常な錯誤を犯す結果となつてゐ  
る。（因みに、右引用文中に、「前八十耳」云々と  
あるのが蝦夷志の述作を事保八里まで引下げる可能  
性を含むものである。）右の記述ではブラウ図には  
、小出てゐないが、この三十七島を考へるに當つて  
は西圖、即ちブラウ圖を参照したことは、采覽異言  
中エソ（野作）の條の記載によつて明瞭である。こ  
れは蝦夷志と異言との關係を知るに役立つものであ  
るから、項を顧みず引用することとする。  
「按西圖。此地唯<sup>（唯）</sup>蝦夷東南沿海一帶地<sup>（地）</sup>。見其端<sup>（端）</sup>便耳  
。其東旁<sup>（旁）</sup>近有<sup>（有）</sup>一小島<sup>（島）</sup>。島名<sup>（島名）</sup>スア<sup>（スア）</sup>。永東方大島<sup>（大島）</sup>。唯<sup>（唯）</sup>置西  
近一帶地<sup>（地）</sup>。島名<sup>（島名）</sup>ロンベ<sup>（ロンベ）</sup>。美<sup>（美）</sup>與<sup>（與）</sup>之和蘭人。曰。大抵我人止  
是其所<sup>（所）</sup>徑歷<sup>（徑歷）</sup>。蓋以<sup>（以）</sup>入<sup>（入）</sup>國。於其所<sup>（所）</sup>不至<sup>（不至）</sup>。蓋<sup>（蓋）</sup>顯如也。  
今觀地圖。スタテンラント。毛人呼<sup>（呼）</sup>爲<sup>（爲）</sup>クルミシ<sup>（クルミシ）</sup>一是也。國說。野作。保  
ロンベラント。即毛人呼<sup>（呼）</sup>爲<sup>（爲）</sup>クルミセ<sup>（クルミセ）</sup>一是也。今據地圖。蝦夷海外三十七  
之黃頭空羣地。不知何所<sup>（何所）</sup>也。國說。野作。保  
コタン番。シキ即空羣也。但其<sup>（其）</sup>大<sup>（大）</sup>圖<sup>（大圖）</sup>所<sup>（所）</sup>置<sup>（置）</sup>也。西圖。野作。原係  
不<sup>（不）</sup>知<sup>（知）</sup>而<sup>（而）</sup>云<sup>（云）</sup>此<sup>（此）</sup>是<sup>（是）</sup>也。詳見<sup>（詳見）</sup>蝦夷志<sup>（蝦夷志）</sup>。故予<sup>（故予）</sup>錄<sup>（錄）</sup>此<sup>（此）</sup>。西圖。野作。原係  
地下國中。而毛人曰<sup>（曰）</sup>古我<sup>（古我）</sup>羣島之屬。故從<sup>（從）</sup>國說。姑

附于此。全集第三、  
レ八四八頁

此の記事中には蝦夷志に見えなかつたスタテンラント (Statens Land) 及びエンペラント (Compagnies) の島名が見えるが、これは蝦夷志執筆以後の補記したものではなく、西図のことを取上げた點に証記したものと想われる。何となれば、オランダ人の最後の会谈は正徳入江使節三年のことであつたからである。

折南最新のブラウ図を見て居りながら、依然舊國圖の説明に據つたのは、ブラウ圖も此の地域の表示が曖昧であつたことのほか、漢文で記された図説の方が白石は親しいものであつたことにもよういづれにしても、白石がエゾの地を以て韃靼に近しいものと認識してゐたことは、右によつて明瞭になつたものと思ふ。而して、異言の記載中に、而も人自古戎羗廣之屬と見えるところから察するに、白石はエゾを以て我國の屬民と考へてゐたのであり、このことは蝦夷志の別名が北倭志であつたことと併せ注意するべき点であらう。なほ、異言に於いては、エソの又にタルタリヤ(韃靼)の記載があるのであつて、これなどに西番に対する關係づけが認められる。右に關連して挙ぐべきは、西洋記聞に述べられた

次の一節であらう。

「按するに、其人(筆者註)の高に、テイナといふは、即支那也。タルタリヤといふは、即韃靼也。ヤアバンニヤといふは、即日本也。此等地方の事

其經歷せし所に係らざれば、其説のしるすべき

争もなし。舊國坤輿圖に拠るに、韃靼の東方、

に至るまでの地を圖して、狗國、寧韋、寧格等の

國、其地にありと見えたり。阿爾陀鐸拔の國(筆者註)

者註)に拠りて、阿爾人の説をさくに、エノ(漢文註)

野作といふ、我國にその北地、タルタリヤに相聯するや、否、いまだ詳ならず。本国鐸板の圖には

エソ東海海口の地のみを圖して、此海口に至て、

こゝにいふ所マスに似たる魚、多く食ひし事を、

注したりといふ。(註) 岩波文庫本、  
略し、五ニ一三頁

此の記事は、シド子についての部分を除けば、蝦夷志

・采覽異言西番の記載と共通するものであるが、こ

れにつづく左の記述は西番のいづれにも見えす、而

して白石の地理観をうかづかに足るものであるから

併せ引用することとしよう。

「またヨランダ人に向ふに、ヲ、ランド地方よ

り此に来るには、其北海より去りて西し、アツリ

カの西を経て、カアプ地方に至て、東に折れ、ア  
ジアン海を過て、バガタラに至り、こゝよりまた  
北して、スマアタラ、ボルネウ等の諸島を過て、  
東北の方、我國に至る。其行程をはかるに、凡一  
萬二千九百里に及ぶといふ。（これまた、我國の  
里数による也）もしチ  
ハランド地方より、北に去りて、東に轉じ、北海  
を經過て東し、（北海はすなはちタルタリーヤマリーヤ  
といふもの、藍海の事をさしいふ也）南に転  
じて、此に來らば、行程わづかに三四千里に過べ  
からず。なにを苦しみてか、此路にはよりざるや  
といひしな、其人のいほく、誠に然也。今より三  
年の前に、アンゲルア人、マイルムダンペイルと  
いふものありて、身みづから北海を越て、東洋に  
至りしといふ。我々の方の人、其事を難じて、天地の  
北日光到らず、海常に暗く、朝暮急也。そのいふ  
所信すべからずといふ。彼人これを憶て、書作り  
て世に行はんとす。もし其書成りて、其言信すべ  
くは、本國の幸、これに過べからずといひき。（こ  
れ正徳二年の事也。其後また此事を問ひしに、去耳、彼人死  
して、書もまたいまだ成らざりきといふ。正徳  
四年甲午の事也。これらの説に拠るに、萬國坤輿圖に見えし所

、盡くに信すべからず。（同右、五三、  
五四頁）  
北海、北極海についての知識に缺ける白石の大胆な  
質問がこゝにあらはれてゐるが、地図を見ながらか  
ういふ鋭い質問を發したところ、いかにも合理主義  
者白石にふさわしい。この質問がきっかけとなって  
、イギリス人ウィリアム・ダンピール（William  
Dampier, 1652-1715）の探險のことがオランダ人の口か  
ら洩れることになつたわけであるが、ダンピールの  
ことは前述のメモ「外國之事情書」にも簡単に見え  
てゐる（註）。これは右の訓註に見える正徳二年壬辰の会  
談に於いて聞いたところで不十分なのである、詳  
細は同じく正徳四年甲午の事也とある、四年の会談  
の際さいたものであらう。なほ右の記述の中、「  
天地の北日光到らず」云々の部分は、蝦夷地の「  
日光不到者、歲凡居半」と相通するものと認められ  
る。なほまた、右の末尾に萬國圖に対する不信の言  
葉が見えるが、萬國圖の誤については幾つか指摘も  
してゐるが一例えは、メガラニカの存在、やはり  
既述の通り、白石は萬國圖及びそれに記入せられた  
説明―白石の謂はゆる図説が、何と云つても白石の

(16) 世界地理研究に於いては缺くべからざるガイドであつたのである。

6

以上、敘述が多岐にわたつたが、白石の整理認識は不正確であり誤もあるにしても、エゾをこれとの近海に於いて考へたことはほゞ明かになつたと思ふので、さういふ意味に於いて蝦夷志の述作は注目せらるべきであり、またその北倭志と併称せられ、殆んど時を同じうして書かれた前倭志―南島志も亦、白石の対外的關心―特に南島志との關係に於いて―昂揚の結果生み出されたものとして、重視さるべきであらう。

前節で述べたやうに、晩年の白石の対外的關心のあらはれを示すものに、幾つかの論文がある。これらは共に白石遺文に收められてゐるが、

- (イ) 蝦夷志中環賦
- (ロ) 采蝦夷志日本書跋
- (ハ) 元祖天皇日本書跋
- (ニ) 通清堂夷録

(イ) 翰互市權場（原文）

等がそれである。此の中、(イ)(ロ)の三篇は、栗田元次教授の見解によれば（参照）、才兼合編に收められてゐたものではないかとも考へられる。また、(ハ)亦は「原文天題」の註がある通り、これは独立した論文でないこと道ちに想像出来るところであるが、全く文章が一致することから思ふに、これは采覧異言中、ジャワ（爪哇）の條の一節を特に抜き出したものであらう（全集卷四、八四五頁、参照）。残る一篇「通清堂夷録」は、或は享保八年に書かれたものであらうか。前掲「通清堂夷録」（同、四四頁）に「靖堂夷録の事」に付、御向目拜見仕、此方家番役合異同候所仕御差圖加急旨候て返望仕候と（全集卷五、四四頁）と見えてゐることが、それを思はしめる。これによれば、白石自身一本を所持してゐたこと明らかで、藩泊の末めに於いて夜合を加へると同時に意見述べたといふので、それが右の如き題名を付せられて傳はつたものではなからうか。（参照）この一篇は、白石の東夷節の事業政策に対する關心を示すものと考へられる。

此の他、香速ではないが、抄録謄写本中には国際関係に、ふれたものが少からずあつたと思はれる。ただ年時の記入がないため、それが果して晩年の筆写に属するものかどうかは、今明かにし難い。年時を度外視して書名を掲げると、管見の及ぶところ、

(一)元人未冠考 (二)天武年間詔諭日本 大通

(三)大明朝鮮興日本和平之條目 (四)西朝國

書 (五)朝鮮書簡 (六)八道官職 (七)元文

類 (八)明文記事 (九)大明会典 (一〇)大明集

礼 (一一)漏涯勝覽 (一二)蘭和集 (一三)圖書編

(一四)萬國集說 (一五)使琉球記 (一六)乘陸

(一七)越前三國浦記(羅祖漂流記) (一八)噶爾

記事 (一九)長崎注進噶爾人事

等がある。いま逐一説明を加へる餘裕がないので一部につき述べる。 (一) (二) (三) (四)は采覧異言の参考書、(五)は西洋紀原の、(六)は南島志の参考書となつたものであり、(七)は別名「羅祖漂流記」とあるが、内容は創業期の清朝の事にふれたもので前節の論述とは関係のないものである、(八)の噶爾記事は、既述の和蘭紀事と題名は似て文字が異なり、内容に至つては次田弥兵衛の台湾渡航一件及び蘭姓翁(鄭成功)の台湾占據の記

録の寫しであつて全くの別物である。なほ(四)は、ミドテ潛入事件についての長崎奉行所からの報告書の寫しであるが、これは一部が西洋紀原にとり入れられたにすぎず、大部分は後に佐久間維章によつて「噶爾人歌状」として紀原に附加せられたが、該寫本の方が記事が多く、またこれには、所載の諸繪圖に白石自身の説明が記入されてある。

その他、晩年の香速で亡佚したもののの中には、左の如きものがある。

殊方通信錄 一帆集 西洋人物集 西學推

向 西學年略雅看遺考

さらに、断片的にオランダ關係の記事を収めるものとして

阿爾陀語向目(假称) 錦不抄 抜梓 音

日餘杖

等があるが、最後の音日餘杖は明かに晩年の執筆にかかると思はれるものであり、且つ注意すべき記事を含んである。

右に於いて、世界地理研究の流行に伴ふ白石の

世界圖認識進展の状況をほゞ觀察したのであるが、その結果、白石が最も深い関心を寄せたのはオランダであつた。さういふ白石の心情が端的に表明せられたのは、前掲一享保七年十月、安積澁泊宛の書簡に於いてであつた。即ち云ふ、

「阿爾陀は彼地方にての強國、大かた肩を並べ候國となきほどに候。國は僅に七州にて候。それらもかしこき事に候。昔廿州餘を斬り取り候を皆々返し候ての事に候。其故は國大きく候へば手に合かね候間、政事も軍事も思ひ候様なり候はぬとの事に候。自由につかはれ候ほどの小勢に候て、直土に横行し候由に候。甲賣の争など様々尋候處、七十年前迄は用ひ候。砲銃出来候ては何の用に立ぬ事故に、重き物蓋候ては自由悪敷候間、不用の由にて候。此一事にて勇氣を御察し可被成候。それをこなたにて一通の商人と心得、うかくとあへいらひ候事、扱々恥かしき事に候。果、前々代(筆者註 叔父代)に、毎々申上候き公儀ものと申候は、阿爾陀の事に候。天地の間に至り候はぬと申所もなく、其手に隨候外國、百二三十國と申候。荷元は皆

々、軍用の助のためと見え候。おそろしき國にて候。  
し(傍点) 全集才五、二九  
し(筆者註) 七一八頁

正徳二年以後、毎年のやうにオランダ人と会ひ、幕府所藏(オランダの献上品)にかゝるオランダ製のブラウ図を見た白石は、その建國の事情及び海外への発展の状況を知るにつれて、オランダ人がすぐれた國民であることを知るに至り、右の如き表白となつたものと思はれるが、オランダ人の勇武について感歎した一資料と考えられるものが、前述正徳二年のメモに記されてゐる。それはオランダ人の戦術法についてのもので、右の記事を補足するものであるから引用して置かう。

「一軍の法次才二巧になりて、今ハ古より勝れたり 鉄砲出来より以來甲冑不用

一騎馬壹人ニ鉄砲ニ挺砲遣す 刀は備の守也

突ク事切ル事ニ不及也 敵来りて行あたりつ

らぬかるゝ如ニする也 もし一歩も退く者ハ

則鉄砲にて打殺す 或足かミ遣ひ或は聲を立

し其の打ころす 是偏の不亂ため也」

右の書簡よりは少々後の、十一月朔日付澁泊宛の



書状に於いてハ一部分はカルタンに属してさきに引用した、オランダの事に言及してゐるが、これに於いては次の如く白石の手によつて略図がえがかれてゐる。

「一阿爾陀等の国々は、唐山など、只一片の地に、海を臨候国にては無之候。たとへば



如此様の争にて候。天竺も阿爾陀の治處候。天竺よりすぐに参候カビタン(筆名註ゴルネ、スリランカ)に於て隆候て物語承り候き。近年康熙天子(中略)前引、元の時に使通じ候も大かた北高海の辺

迄にて可有之候。ハルゴと書付候迄まで當時は露祖の種類と申す事に候。阿爾陀より二十年許り以前、北京へ陸路を便を遣し候に、住還三年かゝり、多くの難所を越過候故に其後は中絶と申候き。全集五、三〇頁

一見して判る通り、略図は頗る大雑把なものであるが、手紙を書きながら直ちにこれだけの地図がえがけたといふことは、當時としては中々出来なないことと思はれるのであり、これを白石自身について云えば、白石の地理学は大いに熟してゐたと見ることも出来るであらう。此の記事が注意すべきものである一つの理由は、こゝに清朝シナとオランダと、さらに露祖との三者とそれら相互の關係とが述べられ、當時の國際情勢についての白石の判断が集約的に、表明されてゐる点にもあらう。この記事中の、オランダから清朝への遣使のことは采覽異言にも見える所であるが(タルタリヤの條、全集四、八四頁)、これは露清間の譯はゆるネルテンスク條約の締結に當つて、清朝がオランダに仲介の勞をとるやう依頼したことに基くものである(采覽異言の成立、參照)。白石はロシアについて正しい

認識をもたなかつた爲、采賈異言以下いづれの着書にも、この清露の係争について記すところなく、ヨーロッパに於ける活動について、格別これを述べてはゐない。としかく、三勢力中、白石の最もおそれたのはオランダであつたので、特に和蘭紀事ならびに、阿蘭陀考を書いたわけでもあるが、かういふ心算が白石をして死に至るまで世界地理研究を続行せしめた原動力であつたのではあるまいか。

## 8

鎖国の功罪については夙から議論がたたかはされて来たが、否定論者の一人新村博士は、五代綱吉の元禄年間、「日本を科学的に見せる最初の人」と評せられる医学者エンゲルベルト・ケンプエルが、オランダ商館長に随行して参府した際、江戸城の大広間で躍らせられたり歌はせられたりしたことゝを以て、その滑稽と悲哀とは譬へようもない、と云はれると共に、白石を取上げて

「十数年の入道ひなくして白石がワーゲマンスへ  
筆者註：外科医、白石の謂はるるウィロニワガマス」の代りにケンペルに会つた

なら如何な結果になつたかと想像して見たくなる。少しは大勢を動かしたかかも知れぬ。（三〇一頁） 統南重鑑と云はれてゐる。白石はシドチとの会談によつて海外事情とヨーロッパの科学の半面を知り大いに眼をひらかしめられたが、博士の云はれるやうに、ケンプエルのやうなすぐれた学者と面談する機会をもちえたならば、白石の獲る所は更に大きかつたであらう。

それにしても、白石が多くの異邦人、特にヨーロッパ人と会ふことが出来たことは、白石をして鎖国時代には稀有な国際人たらしめたやうに思はれる。此の点については、白石自身も自覚して居つたと見え、前引享保七年十月の書簡の前部に於いて

「先年暹羅人に逢候事、御尋にて候。朝鮮の蒙とは毎度心安く度々出合、琉球の王子を始、其外へも所度出合申候。阿蘭陀人には年々出合申候。是は後々宜しき証、可角文事に候。」

と述べ、今後我が国の識者や責任ある立場の人間が外国人と直接面談して、異国についての認識を緊密知見を広くすべきことを主張してゐる。事実、白石

が国際人であつたと認められることは、例えば朝鮮正使趙泰億及びシドチに對してとつた態度にあらはれ、また長崎貿易新令の施行に際してシナの密貿易商の取扱ひを論じた場合の意見等に徴しても明かなやうに、そこには人種的偏見が見られず、むしろ人同観がありはれてゐるのであり、また一国の正義を至上としなない、謂はば國際正義觀とも云ふべきものが現はれてゐる。<sup>(註1)</sup>

現代の我々の眼を以てすれば、白石には多くの注文がつけられるであらうし、少からず批判も加えられるであらう。青木昆陽に先んじて爾語の習得はやつたけれども、爾語は読めなかつたし——その爲にブラウ図を十分になすことが出来なかつた——ヨーロッパについて、地理的認識は十分精確であつたが、その尸尺に暗く、従つてその文化の優秀性も半面しか認めず、キリスト教倫理に對しても不当に厳しい批判を下したのであつた。その他、朱子學者としての偏見もあれば、封建時代人としての偏執も見られなくはない。然しながら、白石の冠愈々未永にむけられ、その冠者は前進前望的であつたが故に

その学的業績は約半世紀の後、国防問題の發生を契機としてヨーロッパについての研究の必要が痛感せられるや、絶対的權威を以て顧みられ、仰望せられるに至つたのであつて、政治家も學者も、蝦夷志を讀み、采賈異言を讀み、或は阿蘭陀志を讀んで、我が國家の在り方と進路とについて眞鋭に考へたのであつた。寛政年間以後に於いて、白石に對する評價はほど定まつたと云つてよいであらう。寛政の改革の中心人物たる松平定信によつて白石は再評價されたのを始め、西洋紀聞の獻上が命ぜられたのは此の時のことである。前巻の山村昌水、その他林子平・三浦梅園・齊藤拙堂等の人々によつて、石に挙げた諸書がよまれ、研究され増補され敷衍されたのであり、その他の方面——尸尺学や、國語学の分野に於いても、白石の業績は、高く評價されるに至つたこと周知の通りである。

晩年の白石は、亡き家室の知遇を思つて自らを齟齬したから、国内ではその存在は目立たなかつたが、かえつて海外に於いて声名を擲てゐたことは、心友佐久間洞巖にむかつて「死朽は憂ほこの学文候と

名譽の耆翁・郭群・琉球・阿爾陀などへ叩へ候て、渡り来り候しの、いかゞ無事に候かなどたづね候が、云々<sup>全集、五、五九頁</sup>と打明けたことで知られるのであるが、その他、多くの争突がこれを立証する、此処に至つて国内に於いて正しく評価されることとなつた。それにして、国内では極く少数者にしか知られてゐなかつた西洋紀聞が、慶応元年二年（一八六五・一八六六）にS・R・ブラウンの鑑証によつて、上海出版の雑誌に掲載され紹介されたこと<sup>（註2）</sup>は、皮肉な事實とすべきであらう。

始めにふれたやうに、白石は普通には學者にして政治家を兼ねた人物であるとせられてゐる。政治家としての白石には批判を加へる人は多いが、學者としての白石には讃評こそおくれ、非議する人は先づないやうである。その學問の領域が廣大であつたことに於いて、白石はフランス十八世紀の謂はゆるアシシクロペチスト、ヴォルテールやデイドロオ、ルソオに比せられたり<sup>（註3）</sup>する。これらの學者について私の知る所は乏しいが、白石その人について云へば、その學問は広いと同時に深さと体系をもつてゐたことが、大きい特徴と云へるかと思ふ。それは、本

稿に於いて取上げた采實異言の如きを見て明かであるので、その他白石の諸著が今日なほ權威をなつのは、これとして然ういふ特微によるものであらう。これを要するに、白石の世界圖認識の深遠底層は、その深き対外的關心に推進されたものであり、その關心は白石の経世家としての深い念慮から発したものであつたと考へる。まことに白石は、謂はゆる政治家ではなくして、経世家であり、同時に科學者であつたので、それ故にこそ、歿後遠からずして多くの追隨者を出だし、今日に至るまで数多の研究者をもち得てゐるのであらう。（丁酉正月稿）

註1 采實異言の成立―『史地選』第六卷第三号所載。  
註2 外国之爭調書について―『天学雑誌』掲載予定。  
。〔此の外国之爭調書の題名は白石自身の命名にかかるものではない。〕

註3 西洋紀聞成立の一考察（新井白石序論所收）、西洋紀聞の成立―『藝文』第六卷第六号、所載。

註4 白石の書簡は、全集所收の分以外になほ少なからずある。例へば、近衛家の陽明文庫に多数所載されてゐる如きがその代表で、自筆ではないが

小宮山楓軒の筆寫した京大本（國史研究室所藏）も、全集にないものを可成り多く含んでゐる。

註5 拙稿「新井白石と趙泰儀（白石序論所收）参照

註6 新开家に伝はる両書の内容本は合綴されて一冊となつてゐる。これは両書の執筆がほぼ同時であつたといふ時間的關係にもよらうが、また両書の性格の天適性と、執筆の動機が一つであつたことによるものではなからうか。因みに堤朝風、白石先生看述書目には、南北倭寇三巻と見え、別々に一書としては掲げてゐない。

註7 蝦夷（内題「蝦夷乱紀事」と題する白石自筆の草本が現在新井家に傳はつてゐる。その試讀は次の如くである。

「右北條新左衛門御使として宝永の比松前にやまむかひ。此の時の事をまのあたり見しものをもめし出して、所をしるせしものを見て、しるせし所也

正徳甲午七月君異識（在印）」

なほ、内閣文庫及び静嘉堂文庫に、「蝦夷之記」と題する写本が所藏せられてゐるが、これらは共に四巻から成り（同一内題）右の記事の他言語風

俗筆、蝦夷に關するもののが収録されてゐる。栗田教授はこれを以て作看未詳とされたが、私はこれを白石の看書と考へる。これと蝦夷志との關係は、恰も琉球國事略と南島志との關係に類するので、はなからうか。此の点は、後日の究明にまうたい。

註8 羣題についてのまとまつた記述は、采覧異言中アジアの部の末尾にタルタリヤとして挙げてある他、トルカの條にこれが遊獵と同類であること、を述べると共に、和蘭人の説を引いて地理的關係を示してゐるが、圖説も西圖もオランダ人の説明も、すべて白石を満足をさせるものではなかつたので、「今姑爾以俟後考」と結んでゐる。

註9 全集本所收の蝦夷志は、誤る誤字が多い、これは振り所とした草本の誤というよりは、主として、誤植のせるであらう。今試みにその一部分を初稿本（新井家所藏）と比較して見ると、次の如くである（「蝦夷」の項の發落名五十四のうち）。ハ括弧内が初稿本」

コラギハハラミ　シリキシチイ（シリキシナイ）  
オサツベ（オサツヘ）　エウラツソ（エウラツプ）  
クンスイ（クンスイ）　ヘシヘ（

ベンベ」等々

註10 不幸にして筆者は未だ見る機会をえたないが、栗田文庫（故栗田元次教授の文庫）に蝦夷志原本書写地図が所載されてゐる様である（名古屋大学文学部研究論集1、所収「新井白石の著書に就いて」に附載された写真複製の中にこれがあつた）。

註11 メモの記す所は次の通りである。  
「三年前（註、三十年前と書いて抹消した跡あり）北海をゆたり見しエゲレスの国の人

エリヤムダンペール

といふもの書を作りしガランダに云ふ  
また試験せざる故に詳なる事しらす」

註12 熊澤信太郎氏著「マテオ・リツチの世界図に關する史的研究所」横濱市立大学紀要（1984年）8（1）188頁以下、参照。

註13 全集所収の白石遺文は日雨亭叢書に拠つたところがあるが、その叢書所収のものは水戸の立原翠軒（萬）の纂輯にかかるとのであるから、此の中にとり入れられてゐることに於いて、その伝本の経路が大凡想像せられるわけである。

註14 天々の所蔵主及び所蔵機関は次の通りである。

（書名省略、巻号のみ挙ぐ）

東洋文庫（1533.1534.1535.1536.1537.1538.1539.1540.1541.1542.1543.1544.1545.1546.1547.1548.1549.1550.1551.1552.1553.1554.1555.1556.1557.1558.1559.1560.1561.1562.1563.1564.1565.1566.1567.1568.1569.1570.1571.1572.1573.1574.1575.1576.1577.1578.1579.1580.1581.1582.1583.1584.1585.1586.1587.1588.1589.1590.1591.1592.1593.1594.1595.1596.1597.1598.1599.1600.1601.1602.1603.1604.1605.1606.1607.1608.1609.1610.1611.1612.1613.1614.1615.1616.1617.1618.1619.1620.1621.1622.1623.1624.1625.1626.1627.1628.1629.1630.1631.1632.1633.1634.1635.1636.1637.1638.1639.1640.1641.1642.1643.1644.1645.1646.1647.1648.1649.1650.1651.1652.1653.1654.1655.1656.1657.1658.1659.1660.1661.1662.1663.1664.1665.1666.1667.1668.1669.1670.1671.1672.1673.1674.1675.1676.1677.1678.1679.1680.1681.1682.1683.1684.1685.1686.1687.1688.1689.1690.1691.1692.1693.1694.1695.1696.1697.1698.1699.1700.1701.1702.1703.1704.1705.1706.1707.1708.1709.1710.1711.1712.1713.1714.1715.1716.1717.1718.1719.1720.1721.1722.1723.1724.1725.1726.1727.1728.1729.1730.1731.1732.1733.1734.1735.1736.1737.1738.1739.1740.1741.1742.1743.1744.1745.1746.1747.1748.1749.1750.1751.1752.1753.1754.1755.1756.1757.1758.1759.1760.1761.1762.1763.1764.1765.1766.1767.1768.1769.1770.1771.1772.1773.1774.1775.1776.1777.1778.1779.1780.1781.1782.1783.1784.1785.1786.1787.1788.1789.1790.1791.1792.1793.1794.1795.1796.1797.1798.1799.1800.1801.1802.1803.1804.1805.1806.1807.1808.1809.1810.1811.1812.1813.1814.1815.1816.1817.1818.1819.1820.1821.1822.1823.1824.1825.1826.1827.1828.1829.1830.1831.1832.1833.1834.1835.1836.1837.1838.1839.1840.1841.1842.1843.1844.1845.1846.1847.1848.1849.1850.1851.1852.1853.1854.1855.1856.1857.1858.1859.1860.1861.1862.1863.1864.1865.1866.1867.1868.1869.1870.1871.1872.1873.1874.1875.1876.1877.1878.1879.1880.1881.1882.1883.1884.1885.1886.1887.1888.1889.1890.1891.1892.1893.1894.1895.1896.1897.1898.1899.1900.1901.1902.1903.1904.1905.1906.1907.1908.1909.1910.1911.1912.1913.1914.1915.1916.1917.1918.1919.1920.1921.1922.1923.1924.1925.1926.1927.1928.1929.1930.1931.1932.1933.1934.1935.1936.1937.1938.1939.1940.1941.1942.1943.1944.1945.1946.1947.1948.1949.1950.1951.1952.1953.1954.1955.1956.1957.1958.1959.1960.1961.1962.1963.1964.1965.1966.1967.1968.1969.1970.1971.1972.1973.1974.1975.1976.1977.1978.1979.1980.1981.1982.1983.1984.1985.1986.1987.1988.1989.1990.1991.1992.1993.1994.1995.1996.1997.1998.1999.2000.2001.2002.2003.2004.2005.2006.2007.2008.2009.2010.2011.2012.2013.2014.2015.2016.2017.2018.2019.2020.2021.2022.2023.2024.2025.2026.2027.2028.2029.2030.2031.2032.2033.2034.2035.2036.2037.2038.2039.2040.2041.2042.2043.2044.2045.2046.2047.2048.2049.2050.2051.2052.2053.2054.2055.2056.2057.2058.2059.2060.2061.2062.2063.2064.2065.2066.2067.2068.2069.2070.2071.2072.2073.2074.2075.2076.2077.2078.2079.2080.2081.2082.2083.2084.2085.2086.2087.2088.2089.2090.2091.2092.2093.2094.2095.2096.2097.2098.2099.2100.2101.2102.2103.2104.2105.2106.2107.2108.2109.2110.2111.2112.2113.2114.2115.2116.2117.2118.2119.2120.2121.2122.2123.2124.2125.2126.2127.2128.2129.2130.2131.2132.2133.2134.2135.2136.2137.2138.2139.2140.2141.2142.2143.2144.2145.2146.2147.2148.2149.2150.2151.2152.2153.2154.2155.2156.2157.2158.2159.2160.2161.2162.2163.2164.2165.2166.2167.2168.2169.2170.2171.2172.2173.2174.2175.2176.2177.2178.2179.2180.2181.2182.2183.2184.2185.2186.2187.2188.2189.2190.2191.2192.2193.2194.2195.2196.2197.2198.2199.2200.2201.2202.2203.2204.2205.2206.2207.2208.2209.2210.2211.2212.2213.2214.2215.2216.2217.2218.2219.2220.2221.2222.2223.2224.2225.2226.2227.2228.2229.2230.2231.2232.2233.2234.2235.2236.2237.2238.2239.2240.2241.2242.2243.2244.2245.2246.2247.2248.2249.2250.2251.2252.2253.2254.2255.2256.2257.2258.2259.2260.2261.2262.2263.2264.2265.2266.2267.2268.2269.2270.2271.2272.2273.2274.2275.2276.2277.2278.2279.2280.2281.2282.2283.2284.2285.2286.2287.2288.2289.2290.2291.2292.2293.2294.2295.2296.2297.2298.2299.2300.2301.2302.2303.2304.2305.2306.2307.2308.2309.2310.2311.2312.2313.2314.2315.2316.2317.2318.2319.2320.2321.2322.2323.2324.2325.2326.2327.2328.2329.2330.2331.2332.2333.2334.2335.2336.2337.2338.2339.2340.2341.2342.2343.2344.2345.2346.2347.2348.2349.2350.2351.2352.2353.2354.2355.2356.2357.2358.2359.2360.2361.2362.2363.2364.2365.2366.2367.2368.2369.2370.2371.2372.2373.2374.2375.2376.2377.2378.2379.2380.2381.2382.2383.2384.2385.2386.2387.2388.2389.2390.2391.2392.2393.2394.2395.2396.2397.2398.2399.2400.2401.2402.2403.2404.2405.2406.2407.2408.2409.2410.2411.2412.2413.2414.2415.2416.2417.2418.2419.2420.2421.2422.2423.2424.2425.2426.2427.2428.2429.2430.2431.2432.2433.2434.2435.2436.2437.2438.2439.2440.2441.2442.2443.2444.2445.2446.2447.2448.2449.2450.2451.2452.2453.2454.2455.2456.2457.2458.2459.2460.2461.2462.2463.2464.2465.2466.2467.2468.2469.2470.2471.2472.2473.2474.2475.2476.2477.2478.2479.2480.2481.2482.2483.2484.2485.2486.2487.2488.2489.2490.2491.2492.2493.2494.2495.2496.2497.2498.2499.2500.2501.2502.2503.2504.2505.2506.2507.2508.2509.2510.2511.2512.2513.2514.2515.2516.2517.2518.2519.2520.2521.2522.2523.2524.2525.2526.2527.2528.2529.2530.2531.2532.2533.2534.2535.2536.2537.2538.2539.2540.2541.2542.2543.2544.2545.2546.2547.2548.2549.2550.2551.2552.2553.2554.2555.2556.2557.2558.2559.2560.2561.2562.2563.2564.2565.2566.2567.2568.2569.2570.2571.2572.2573.2574.2575.2576.2577.2578.2579.2580.2581.2582.2583.2584.2585.2586.2587.2588.2589.2590.2591.2592.2593.2594.2595.2596.2597.2598.2599.2600.2601.2602.2603.2604.2605.2606.2607.2608.2609.2610.2611.2612.2613.2614.2615.2616.2617.2618.2619.2620.2621.2622.2623.2624.2625.2626.2627.2628.2629.2630.2631.2632.2633.2634.2635.2636.2637.2638.2639.2640.2641.2642.2643.2644.2645.2646.2647.2648.2649.2650.2651.2652.2653.2654.2655.2656.2657.2658.2659.2660.2661.2662.2663.2664.2665.2666.2667.2668.2669.2670.2671.2672.2673.2674.2675.2676.2677.2678.2679.2680.2681.2682.2683.2684.2685.2686.2687.2688.2689.2690.2691.2692.2693.2694.2695.2696.2697.2698.2699.2700.2701.2702.2703.2704.2705.2706.2707.2708.2709.2710.2711.2712.2713.2714.2715.2716.2717.2718.2719.2720.2721.2722.2723.2724.2725.2726.2727.2728.2729.2730.2731.2732.2733.2734.2735.2736.2737.2738.2739.2740.2741.2742.2743.2744.2745.2746.2747.2748.2749.2750.2751.2752.2753.2754.2755.2756.2757.2758.2759.2760.2761.2762.2763.2764.2765.2766.2767.2768.2769.2770.2771.2772.2773.2774.2775.2776.2777.2778.2779.2780.2781.2782.2783.2784.2785.2786.2787.2788.2789.2790.2791.2792.2793.2794.2795.2796.2797.2798.2799.2800.2801.2802.2803.2804.2805.2806.2807.2808.2809.2810.2811.2812.2813.2814.2815.2816.2817.2818.2819.2820.2821.2822.2823.2824.2825.2826.2827.2828.2829.2830.2831.2832.2833.2834.2835.2836.2837.2838.2839.2840.2841.2842.2843.2844.2845.2846.2847.2848.2849.2850.2851.2852.2853.2854.2855.2856.2857.2858.2859.2860.2861.2862.2863.2864.2865.2866.2867.2868.2869.2870.2871.2872.2873.2874.2875.2876.2877.2878.2879.2880.2881.2882.2883.2884.2885.2886.2887.2888.2889.2890.2891.2892.2893.2894.2895.2896.2897.2898.2899.2900.2901.2902.2903.2904.2905.2906.2907.2908.2909.2910.2911.2912.2913.2914.2915.2916.2917.2918.2919.2920.2921.2922.2923.2924.2925.2926.2927.2928.2929.2930.2931.2932.2933.2934.2935.2936.2937.2938.2939.2940.2941.2942.2943.2944.2945.2946.2947.2948.2949.2950.2951.2952.2953.2954.2955.2956.2957.2958.2959.2960.2961.2962.2963.2964.2965.2966.2967.2968.2969.2970.2971.2972.2973.2974.2975.2976.2977.2978.2979.2980.2981.2982.2983.2984.2985.2986.2987.2988.2989.2990.2991.2992.2993.2994.2995.2996.2997.2998.2999.3000.3001.3002.3003.3004.3005.3006.3007.3008.3009.3010.3011.3012.3013.3014.3015.3016.3017.3018.3019.3020.3021.3022.3023.3024.3025.3026.3027.3028.3029.3030.3031.3032.3033.3034.3035.3036.3037.3038.3039.3040.3041.3042.3043.3044.3045.3046.3047.3048.3049.3050.3051.3052.3053.3054.3055.3056.3057.3058.3059.3060.3061.3062.3063.3064.3065.3066.3067.3068.3069.3070.3071.3072.3073.3074.3075.3076.3077.3078.3079.3080.3081.3082.3083.3084.3085.3086.3087.3088.3089.3090.3091.3092.3093.3094.3095.3096.3097.3098.3099.3100.3101.3102.3103.3104.3105.3106.3107.3108.3109.3110.3111.3112.3113.3114.3115.3116.3117.3118.3119.3120.3121.3122.3123.3124.3125.3126.3127.3128.3129.3130.3131.3132.3133.3134.3135.3136.3137.3138.3139.3140.3141.3142.3143.3144.3145.3146.3147.3148.3149.3150.3151.3152.3153.3154.3155.3156.3157.3158.3159.3160.3161.3162.3163.3164.3165.3166.3167.3168.3169.3170.3171.3172.3173.3174.3175.3176.3177.3178.3179.3180.3181.3182.3183.3184.3185.3186.3187.3188.3189.3190.3191.3192.3193.3194.3195.3196.3197.3198.3199.3200.3201.3202.3203.3204.3205.3206.3207.3208.3209.3210.3211.3212.3213.3214.3215.3216.3217.3218.3219.3220.3221.3222.3223.3224.3225.3226.3227.3228.3229.3230.3231.3232.3233.3234.3235.3236.3237.3238.3239.3240.3241.3242.3243.3244.3245.3246.3247.3248.3249.3250.3251.3252.3253.3254.3255.3256.3257.3258.3259.3260.3261.3262.3263.3264.3265.3266.3267.3268.3269.3270.3271.3272.3273.3274.3275.3276.3277.3278.3279.3280.3281.3282.3283.3284.3285.3286.3287.3288.3289.3290.3291.3292.3293.3294.3295.3296.3297.3298.3299.3300.3301.3302.3303.3304.3305.3306.3307.3308.3309.3310.3311.3312.3313.3314.3315.3316.3317.3318.3319.3320.3321.3322.3323.3324.3325.3326.3327.3328.3329.3330.3331.3332.3333.3334.3335.3336.3337.3338.3339.3340.3341.3342.3343.3344.3345.3346.3347.3348.3349.3350.3351.3352.3353.3354.3355.3356.3357.3358.3359.3360.3361.3362.3363.3364.3365.3366.3367.3368.3369.3370.3371.3372.3373.3374.3375.3376.3377.3378.3379.3380.3381.3382.3383.3384.3385.3386.3387.3388.3389.3390.3391.3392.3393.3394.3395.3396.3397.3398.3399.3400.3401.3402.3403.3404.3405.3406.3407.3408.3409.3410.3411.3412.3413.3414.3415.3416.3417.3418.3419.3420.3421.3422.3423.3424.3425.3426.3427.3428.3429.3430.3431.3432.3433.3434.3435.3436.3437.3438.3439.3440.3441.3442.3443.3444.3445.3446.3447.3448.3449.3450.3451.3452.3453.3454.3455.3456.3457.3458.3459.3460.3461.3462.3463.3464.3465.3466.3467.3468.3469.3470.3471.3472.3473.3474.3475.3476.3477.3478.3479.3480.3481.3482.3483.3484.3485.3486.3487.3488.3489.3490.3491.3492.3493.3494.3495.3496.3497.3498.3499.3500.3501.3502.3503.3504.3505.3506.3507.3508.3509.3510.3511.3512.3513.3514.3515.3516.3517.3518.3519.3520.3521.3522.3523.3524.3525.3526.3527.3528.3529.3530.3531.3532.3533.3534.3535.3536.3537.3538.3539.3540.3541.3542.3543.3544.3545.3546.3547.3548.3549.3550.3551.3552.3553.3554.3555.3556.3557.3558.3559.3560.3561.3562.3563.3564.3565.3566.3567.3568.3569.3570.3571.3572.3573.3574.3575.3576.3577.3578.3579.3580.3581.3582.3583.3584.3585.3586.3587.3588.3589.3590.3591.3592.3593.3594.3595.3596.3597.3598.3599.3600.3601.3602.3603.3604.3605.3606.3607.3608.3609.3610.3611.3612.3613.3614.3615.3616.3617.3618.3619.3620.3621.3622.3623.3624.3625.3626.3627.3628.3629.3630.3631.3632.3633.3634.3635.3636.3637.3638.3639.3640.3641.3642.3643.3644.3645.3646.3647.3648.3649.3650.3651.3652.3653.3654.3655.3656.3657.3658.3659.3660.3661.3662.3663.3664.3665.3666.3667.3668.3669.3670.3671.3672.3673.3674.3675.3676.3677.3678.3679.3680.3681.3682.3683.3684.3685.3686.3687.3688.3689.3690.3691.3692.3693.3694.3695.3696.3697.3698.3699.3700.3701.3702.3703.3704.3705.3706.3707.3708.3709.3710.3711.3712.3713.3714.3715.3716.3717.3718.3719.3720.3721.3722.3723.3724.3725.3726.3727.3728.3729.3730.3731.3732.3733.3734.3735.3736.3737.3738.3739.3740.3741.3742.3743.3744.3745.3746.3747.3748.3749.3750.3751.3752.3753.3754.3755.3756.3757.3758.3759.3760.3761.3762.3763.3764.3765.3766.3767.3768.3769.3770.3771.3772.3773.3774.3775.3776.3777.3778.3779.3780.3781.3782.3783.3784.3785.3786.3787.3788.3789.3790.3791.3792.3793.3794.3795.3796.3797.3798.3799.3800.3801.3802.3803.3804.3805.3806.3807.3808.3809.3810.3811.3812.3813.3814.3815.3816.3817.3818.3819.3820.3821.3822.3823.3824.3825.3826.3827.3828.3829.3830.3831.3832.3833.3834.3835.3836.3837.3838.3839.3840.3841.3842.3843.3844.3845.3846.3847.3848.3849.3850.3851.3852.3853.3854.3855.3856.3857.3858.3859.3860.3861.3862.3863.3864.3865.3866.3867.3868.3869.3870.3871.3872.3873.3874.3875.3876.3877.3878.3879.3

贖る不審を覚えしめる点の一つである。本文に、引いた港泊宛書簡へ享保八年正月付、康熙帝の諱略を述べた條の後文に於いて「此方の銅は西、鑒、銀、の歳幣三千斤づゝ入候料にて候。中国の物を、用ひす候て、日本の物にて済し候爲に候。」と述べてゐる、その西、鑒、銀、は或はロシアのことで、歳幣三千斤とはネルチンスク條約締結の一條件たる交易の量をさして云つたもののやうにも考へられるが、如何であらうか。東洋史専門家の御教示を得たい。

註18 白石のオランダ觀として、附け加へておくべきは、折たく柴の記中、長崎貿易新令に關連して記した左の一節であらう。

「此ほど阿蘭陀船の歸る時に、私販の事あり、此國の人かゝる事ありしは、未曾有の事なり、全集才三、一六五頁、

即ち、シナ人の密貿易は珍らしくないが、オランダ人までがそれをやつたことを知つて意外としたわけである。

註19 前掲、白石序論、四六一四七頁、参照。

註20 村岡與嗣教授校訂『西洋紀聞』(岩波)七八頁参照。

註21 古川哲次氏著『新井白石』一五一頁、参照  
〔附記〕

本稿に於いて参考、もしくは引用した史料の中には、機関及び個人の御好意により披見の機会を得たものが少なからずある。こゝに、宮内庁書陵部をはじめ、内閣文庫・東洋文庫・静嘉堂文庫・陽明文庫、及び新井清氏に対し、厚く御礼申し上げる。

終り